

第212回くらしの植物苑観察会 2016年11月26日(土)

-明治時代の菊ブーム-

平野 恵 (台東区立中央図書館 郷土・資料調査室専門員)

観察会では、大隈重信・酒井忠興をとりあげ、それぞれの菊作りの特徴と社会に及ぼした影響を見ていきます。あわせて江戸時代の大家の菊作りの例を『宴遊日記』から、昭和初期の菊作りを『菊花栽培秘訣』からとりあげ、明治時代との比較をしていきます。

1 大隈重信と菊作り 『グラフィック』1巻21号、有楽社、明治42年11月(国立国会図書館蔵)

大隈重信の本格的な菊作りは、明治29年(1896)に開始され、大菊、狂い菊(江戸菊)、嵯峨菊、一文字菊、丁子菊、小菊など、様々な種類の菊が栽培された。

○菊作り開始 …大隈伯は今年大いに菊花を培養するの企あり。広く全国の知人に書を飛ばして菊の名種を求め新たに早稲田なる邸続きの田圃を贖ふて土を均し壇を築き之に数十百種の名ある菊を植ゑんとて昨今着手したりと云ふ。…(明治29年3月19日『読売新聞』)

○初年度の様子 …大菊と唱ふる直径一尺八寸位に開花するもの、狂ひ菊と称する中菊、嵯峨菊(一名糸菊)、平もの(十六弁巾平たきもの)、丁子咲、七子小菊、吹詰等ありて殊に同園自慢のものは中菊の大造り六株にして是は五百輪程開花する由中には巧に接ぎ穂をなしたるものあれば異様殊色の開花を見るべく金風園に満つるに至らば奇観を呈するならんといふ(同年9月1日『読売新聞』)

○菊花壇の様子 …花壇の設は、七八ヶ所にして、大菊の花壇あり、糸咲菊の花壇あり、狂咲の花壇あり、野菊の花壇あり、又串ざし造りにせるあり、盆栽にしたるあり、黄ぎく白ぎく、其の他色々良種を撰び、妙品をあつめ、植付の配合、極めて宜しきを得て、一も缺点あるなし、中に就き最妙なるは、大菊の造り方なり、一本一花を発せしめ、其の花極めて大なり、玻璃がねをもて、花をうけ止めたる手際頗宜し、又最珍らしきは、串ざし造りなり、これ古昔の造り方にして、一株の花の数、五四五と三段に並べ造りたるものなり、細き気を横たへ、それに花を結び付けたるさま、恰串ざしの如くなれば、串ざしとは、名付けたるならん、…(明治33年11月21日『読売新聞』)

2 酒井忠興と菊作り

酒井忠興は、大隈重信より10年遅れて菊作りを開始したが、「勝鬨」「代々の誉」「白鷺城」の銘花を作出するに至った。玄人もうらやむほどの菊花壇は、評判を呼び、一般にも公開された。

○『日本園芸雑誌』173号、明治39年(国立国会図書館蔵) …上方楕円形内に収めたるは、丸ビンザシ。角ビンザシ及篠作りにして、中央に立てるはいふまでもなく主人伯なり。下方長方形うちのそれは、鬨、代々の誉、白鷺城の銘ある大作りなり。

○菊花壇設置 昨年曾根蔵相の勧誘にて、始めて菊花を培養し八間の花壇と外に小花壇数ヶ所を設けたり、本年は未だ其節ならねば観る能はず(明治39年『新撰東京名所図会小石川区之部』)

○ **公開菊花壇** …約千種の菊が此処彼処に設けた七つの花壇に咲き匂ひ、えならぬ香をプンプン放つて居る、花壇は何れも葎簀張りの風雅かなるに酒井家の紋所染めた綾や縮緬の幕さへ打ち廻してある、菊は平弁、繰弁、匙弁の三つが揃つて正菊の称ある中菊が最も多い、植方造方は様々で一株十五輪の角鬢差、十四弁大輪の一字、一輪の王花を五輪の臣花が囲む越後作、京都御所好みの嵯峨菊、末広の箒作、一輪大の西京作、一株茎六百乃至八百輪の大造等で伯が苦心の跡は何れにも髣髴として居る、花は男山や月下の翁の様な真盛りで黄菊の種々之に垂ぐ、筆染川、貴妃の舞、満園の薫、金茶煎などの名花は十五日前後が見頃であらう・・・伯は自分一人楽しむよりも楽を公衆に頒ち度いとあつて四日午後一時から四時までを限り一般の人々に観覧さして居る…（『盆栽雅報』67号、明治44年11月）

○ **江戸菊の名花** …目を惹いたのは四百輪内外の花を持つた篠作りの中菊「勝鬃」、「代々之譽」、「白鷺城」等より「一字作大菊」その他「嵯峨菊」「小菊」等数を尽した花壇と、真柏、五葉、ムベ等の盆栽類で、何れも黒人の垂涎置く能はざる所のものである（大正元年『日本園芸雑誌』）

3 大名家の菊作り一宴遊日記から一

○ **国会図書館蔵『田安家邸園図』菊花壇 市松模様の雨除障子／露台／石台植の松の盆栽**

○ **馬龍の世話 天明3年まで**（安永8・2・29）兼而園中菊を作り見せん事を約し、今日菊造同道花壇見する、当時西久保昌山主税邸に倚住清川馬龍と云隠居之由／（安永9・9・10）「止宿」（泊りがけの手入れ）／（同・11・6）「馬龍菊を刈に来る」／（天明2・11・14）「馬龍菊の根掘に来る」／（同3・4・4）「馬龍来、此度は新花而已植る」（新花だけの栽培依頼）

○ **ませ垣・障子**（安永8・9・19）「五十嵐・中村、菊の雨障子を掛、藩を造る」／（安永9・9・28）「三申庵庭の菊の覆ひ掛る」／（安永10・9・6）「奥菊壇の覆造る」／（天明2・9・13）「三四日前より菊綻ひ、今日囲ひ造り障子掛る」／（同17日）「奥庭お隆庭へ菊壇囲ふ」

○ **福山藩阿部家**（天明3・10・4）「福山侯丸山下館の菊見たき故、米魚か彼か俳友の彼館に在者の方へ談合に遣はす、…菊も未献上済されは見物を免されず、近日献上済て知らずへき由云」／（天明4・10・3）安部侯御部屋隠居所にて溝口を遣し菊を見んと申遣せしに見せず。／（安永6・10・8）三辻わき阿部勢州内称の里の菊を見る、花壇三間計坐敷二間庭造樹等あり。

4 昭和初期の菊作り

昭和戦前期には、菊作りの技術は、地方へ、大衆へと広がっていった。このことがよくわかるのが、石井勇義の『菊花栽培秘訣』である。また、宮内省の管理する新宿御苑も制限を設けつつも一般に公開されていた。

- 『菊花栽培秘訣』（昭和4年 [1929]、本館蔵）
- 新宿御苑観菊会（部分） 昭和6年（本館蔵）

.....

次回予告 第213回くらしの植物苑観察会 2016年12月17日（土）
 「近代のサザンカ」（箱田 直紀 恵泉女学園大学・名誉教授）
 13：30～15：30（予定） 苑内休憩所集合申込不要